

「社会学の危機」から、「バイオダーウィニスト」の 「理解」社会学へ

桜井芳生

【社会学の危機？】

日本語圏で、社会学者をやっているとあまり気にならないかもしれないが、英語圏での社会学情報にふれるといやでも目にはいるのが「社会学の危機」の問題である。

多くの大学で、社会学部がリストラされたり、大書店の社会学の棚がごぞっと、カルチュラル・スタディーズの棚にラベルがえされたり、理論・方法論レベルでも、ゲーム論・新古典派経済学的方法に席卷されるかのようにみえたり、、、と、「社会学」のラベルは、あまり景気がいいとは感じられない。

そのような「社会学の危機」をめぐる論調のなかで、よく言及されるのが、コスミデス・トゥービーによる、「標準的社会科学モデル (SSSM)」批判の議論だろう。

【コスミデス・トゥービーによる、「標準的社会科学モデル」批判】

社会科学においても進化生物学的な視点が不可欠であるという主張を体系的かつ精力的におこなったのは、*The Adapted Mind* (Darkow et al. 1992)に収録されたトゥービーとコスミデスの論文“The Psychological Foundations of Culture”である。

このなかで、彼らは「標準社会科学モデルSSSM」を批判し、「統合因果モデルICM」という、進化心理学を基盤とし、自然科学と社会科学とをつなぐ試みを提唱した。

進化心理学とは、進化生物学の適応主義のアプローチをとり認知科学の手法を取り込んだ研究で、人間の肉体的形質だけでなく、心的なはたらきの多くも進化の産物であり、領域特異的、内容依存的な多数の適応的モジュール（つまり、一般的な能力を多数の特殊なケースに応じて使い分けるのではなく、この課題にはこの能力、別の課題には別の能力というように、特殊化された能力の集まり）からなると見なす。

こういったモジュールからなる

- (1) 「人間本性」は文化の違いを越えて人間に普遍的であり、
- (2) これがなければ特殊な文化の成立や学習も不可能であるし、また

(3) これを無視しては自然科学と統合的な社会科学も成り立たない、というのが彼らの中心的主張である（内井による）。

筆者は、彼らのSSSM批判は、かなり当たっていると感じる。いままでの社会学をはじめとする社会諸科学は、進化生物論をはじめとする自然科学的人間認識の成果を不当に軽視してきたと、感じる。

しかし、本論において、この点を争おうとはおもわない。この種の「伝統をいかに評価するか」という問題設定は、「いや（生物学的認識をふまえた）このような事例もある」「いやいや、（まさに生物学的認識を無視した）あのような事例がある」という、事例提起の水掛け論になりそうな予感がするからだ。そして、あまり生産的でない議論になってしまいそうな予感がするからだ。

本稿で行いたいことはそれではない。

そうではなくて、社会学の伝統にある中核部分が、近代科学についてのある種の思いこみによって、不当に軽視されてきたのであるが、その部分を、まさに、現代バイオダーウィニズムを援用することで、再評価することができるのではないか、ということである。

その中核部分とは、理解社会学の方略である。

【現代バイオダーウィニズム援用による、理解社会学の再位置づけ】

ここでは、とくにわれわれ社会学者にとって、大きな意義をもつある問題をめぐって、現代ダーウィニズムがどのような援用可能な理説であるのか、を示してみたい。

そうすることで、理解社会学をはじめとする社会学の方略への、懐疑が、（完全に払拭されるとはいかなくても）かなり軽減し・異なった様相でみえてくるということを示してみたい。

【(理解) 社会学への懐疑】

理解社会学をはじめとする近代社会学の方略は、他の諸経験科学から、(経験) 科学に値しないものとしてみられていたのではないだろうか。

これには、さまざまな理由があるだろうが、大きな理由としては、社会学の（すくなくが）当事者の思念された意味をも照準する「理解社会学」の方略をとっていたことと関連するとおもわ

れる。

ただし、ここで、注意すべきことがある。理解社会学者にも、その批判者にも、かならずしも明確に自覚されていたなかったともおもうが、理解社会学的方略を理由とする社会学の（非）科学性への懐疑には、じつは、少なくとも「二つのレベル」がありうるのである。

第一は、理解社会学的方略を選択するというまさにそのこと自体を必然的な理由として、そのような（自称）科学は、近代経験科学に値しない、とする立場である。

第二は、第一のようにはかんがえないが、「理解社会学的方略を選択したことによるほぼ必然的な帰結として、学理上の難点（端的にいえば、「他我理解問題」）に逢着するがゆえに、理解社会学は、科学に値しない」とする立場である。

この二つの論点は、非常に似通ってみえるので、ほとんどの場合は、分別されてこなかっただろう。

しかし、以下のべるように、この二論点を、分別することは、エッセンシャルであり、かつ、このように二論点を分別すれば、現代ダーウィニズムの進展が、理解社会学の擁護に資するものであることが、より容易に理解できるようにおもわれる。

第一の論点から、触れてみよう。これは、いってみれば、「たとえ、他我理解問題のような難点に逢着しないとしても、そもそも、分析対象である社会（や、その構成個人）を、意味的に理解しようとする方針自身が、近代経験科学に値しない」というものである。

これは、じつは「そもそも」論なので、反論しようがない。近代経験科学の「定義」（要件の一つ）を、「分析対象を意味的に理解しようとしなさい」ということにしてしまえば、定義の約定問題に帰着してしまい、反論しようがない。が、また、その主張自体は、恣意的なものにすぎなくなってしまふ。

というわけで、じつは、なぜ、このような理説が説得力をもつようにみえるのか、ということからさぐって、再検討してみよう。

この点に関しては、現代バイオダーウィニズムにおける「心の理論」アプローチが啓発的である。

【セオリーオブセオリー、と、セオリーオブマインド】

現代バイオダーウィニズムにおいては、当然のことながら、われわれヒトによる認識も、かれら

の環境への適応形態の一種としてとらえられる。

ヒトの認識能力もさまざまな下位種類のものが存在する。が、とくにそのなかで、いわば生得的に二つの大きな認識能力をわれわれヒトをはじめとするある種の生物たちはもっていると、現代ダーウィニストたち（のある者たち）はかんがえる。

論者によって、呼び方はさまざまだが、一つは、セオリーオブセオリーであり、二つめは、セオリーオブマインドである。

前者は、外界をいわば、「物」として把握する認識法である。そこにおける「物」は、古典力学における物質概念と驚くほど類似している（というか事実としては、前者を心理的基盤として古典力学が発想され、前者の物質概念とほとんどおなじであるゆえに容易に、古典力学は、普及したのだろう）。であるがゆえに、素朴物理学とも、呼ばれる。

後者は、対象をいわば「心ある者」として把握する認識法である。すなわち、ヒトは、生得的に（かなり幼児のときから）外界のある部分対象を、心ある者としてその心理を探ろうとする、「素朴心理学」者であるとする、かんがえかたである。

上記の理解社会学への第一の非難とは、経験科学である以上は、この二種の認識のうちの前者のみを働かせるべきである、という暗黙の前提にたっていたのではないだろうか（それ以外に、この「第一の非難」が少しでも説得的に響く理由をかんがえられるだろうか）。

事実として、近代科学（とくに古典力学）は、この素朴物理学の延長上に発展し、大きな成功をおさめた。

しかし、だからといって、科学たるもの、素朴物理学的認知法にのみよるべきで、素朴心理学的認知法にもとづくべきでない、とかんがえるだとしたら、それは、（過去の）事実から、当為を導出してしまふ、いわゆる「自然主義的誤謬」ではないだろうか。

むしろ、科学的認識か、そうでない認識か、の線引きには、「素朴物理学、か、素朴心理学、か」という線引きは、必然的にはむすびつかない、と私はかんがえる。むしろ、ポパー的な「反証可能な仮説構築→そのテスト→仮説の保持/棄却→改訂仮説構築、…」といったてつづきこそが、科学的認識の線引きにはふさわしいとかんがえる。

上記の素朴心理学の延長上で、このような「仮説→テスト」的手続きを遂行することには、とくに論理的な不可能性はみいだせない、とかんがえる。もちろん、「事実上」は、素朴物理学のラインでの「仮説→テスト」手続きの方が前者よりも親和的だったかもしれない。

しかし、物理学的世界認識がある程度成功した今日においては（この方途の「限界効用が十分減ってしまった」今日においては）、「意味」的な（すなわち素朴心理学の延長上での）科学的認識が試みられるべき時にきていると私は考える。（ここまでの議論は、LSEにおけるバドコック博士の授業に大いに負っている。記して感謝いたします）。

こうして、第一の論難から、現代ダーウィニズムを援用することによって、理解社会学の方略は、擁護される、と思う。

【第二の論難に対して】

第二の論難は、以下のようなものであった。たとえ、理解社会学を、ただたんに理解社会学であるゆえにのみ論難しないにせよ、その方略のほとんど必然的な帰結として、大きな難点にそれは逢着する。すなわち、他者の思念する意味をどう理解するのか（理解できるのか）、という難点である、と。

この難点について、現代ダーウィニズムは大きな啓発をもたらして、くれる。ただし、それによって、この難点が完全に解消されるか、ということそこまでの自信はない。

しかし、現代ダーウィニズムとくにハンフリーの内なる目理論を援用すると、この他我理解の難点がかかりちがったようにみえてくるだろう。その結果、この点の困難性は、かなり軽くみつもられるようになるとかんじられる。

すこしさきばしてしまった。この他我理解の困難性が理解社会学への難点になると感じるということ自体、じつは、ある暗黙の前提によっているのではないだろうか。すなわち、各人は、自分の行為にたいする自分の思念する意味をその内心におのおのもっている、という図式である。

すなわち、明証的に理解しているはずのものを、その内心のそとからいかにして、それに近似するか、ということになってしまう。

しかし、ハンフリーの視点からは、そうではない。もともと、他個体の振る舞い予測のための方略として、意味理解が進化したと考えられる。しかも、この他個体把握における意味利用は、近代科学の仮説＝テスト図式に親和的である。

ここで（も）、心の理論とよばれる、一連の認知についてのアプローチをおこなっている、現代ダーウィニストたちの議論が参考になる（以下は、Baron-Cohen1995, Dennett1996, Humphery1986, をまとめたものである）。

ここに他個体をふくむ外界を認識しているある動物がいたとしよう。この動物は、外界を上述の「素朴物理学」的にも認識しているだろう。

が、たとえば、補食者（ライオンなど）が、彼をたべようとおそってきたような場合には、民間物理学的な認識をしていては、間に合わない。ライオンのある種の振る舞いをみて、自分をたべ「ようとしている」という、いわば、意図を（先）読みするような認知法が、彼の生存に資するだろう。

これは、同種間（群れ内外とか）のやりとりにおいても、このような認知法が有利である場合が多いだろう。このような認知法を、デネットやバロン＝コーエンは、「意図のスタンス」と呼んでいる。

ここで、重要なのは、この「意図のスタンス」による認知が有利にはたらくためには、その補食者なりやりとりの相手なりのいわば「内心」に実際にそのような「意図の自覚」があることは、まったく必要条件ではない、ということである。

そしてまた、事実上・進化史上においても、このような意図のスタンスの発生は、各個体が自分の意図を自覚するようになるヨリまえに生じていた蓋然性が高いと思われる。

なぜなら、以下述べるような理由以外に、わざわざ自分の意図を自覚することの進化上の利益はありそうもないから。

さて、以上のように、(現実にはその内心において自覚されているのかわからない。しかし、また、先読みすることが自分の生存に有利にはたらくような) 意図の(相互)読み込みゲームにおいて、ひとつの有利な戦略が進化史上で発生した、と、ハンフリーはかんがえる。

すなわち、自分の行動を自己モニターするような「内なる目」の発生である。すなわち「歴史のいずれかの時点で、新しい種類の感覚器官、すなわち内なる目が進化したと想像してほしい」(ハンフリー：82)とハンフリーは、いう。この内なる目による「自分の行動についての説明は、他人の行動を説明する基盤をも形成する」(ハンフリー：85)だろう。「他者にあてはめるためのモデルとして自らをつかうというこのトリックは、人類に非常によく役立つものとなっている」(ハンフリー：90)。

すなわち、もともと「内心における自覚された意味(意図)」というものがあって、それをなんとかして、その内心の「外から」認識しようとした(他者の意味理解)「のではなくて」、

内心における自覚された意味をもっているのかわからない(たぶんまだもっていない)他個体に向けての「意図のスタンス」という認知法、が、「まず、はじまり」、

その事実を前提(与件)として、その文脈のなかでのより有利な方略として、自己意味把握が発生した、という順序・図式なのである。

(ただし、「もともと内心における自覚された意味があった」ということが、論理必然的に否定されたわけではない。このことの必然的否定は困難である。しかし、進化論的に考えると、そのような「なんのやくにたつかわからない、コストばかりかかりそうなこと」が、以下の事態の発生に「先行していた」ということはありそうもないことである。また、たとえ、「もともと、、、あった」ということが事実であったとしても、この意図のスタンスの進化史にとっては、それはじつはどうでもよいことである。)

この仮説は、他者に対する意味理解をするさいの、「まず他者に内心に何らかの意味把持があり、それを、その個体のそこからいかに把握できるか」とかんがえてしまう暗黙の前提を、かなりディコンストラクトしてしまうように感じられる。

すなわち、行為の意味という概念そのものが、「素朴理解社会学者」たるある種の動物の進化論的発達史の帰結としてしょうじたものであって、そこにあっては、原理的には「当人が意味把持をしようがまいが、どうでもいい」ようなものであった。

しかし、その進化論的發展史の「より後の段階」で、上記の動物たちのさらにある種のものたち(たとえばヒト)が、その他者への意味理解を自己へも適用してしまった、という図式となる。

ほとんどの場合、ある個体についての情報を一番おおくもっているのは、その個体自身である場合がおおいから、この自個体による「自分という他個体への意味理解」は、他個体による意味理解よりも「精度が高い」場合がおおいだろう。しかし、これはあくまで、程度の差でしかない。

経験科学というものを、ヒトが進化史のなかで、獲得してきた認識法の延長線上にいちづけるならば、理解社会学は、このような他個体認識におけるセオリーオブマインド的側面的發展体ということになるだろう。

つまり、もともと、他個体認識というタスク(課題)から出発し、現在でも他個体認識というタ

スクを負っている認識法（の一つ）といえるだろう。

ただ、その発展史の流れのなかで、いわばたまたま、意味的認識法が、自個体把握にも、“応用”されてしまった。

そのこと自体は、なにも問題はなかった。しかし、自個体への意味把持が、あまりに明証的に感じられてしまったので、すべての各個体の自個体意味把持が、“究極目標にすべきである”かのようによに“誤認”されてしまったのではないだろうか。

このようにかんがえると、行為者の意味理解をするばあいに、行為者本人の「思念された（主観的）意味」に照準するがゆえに、それは、究極的には不可能である、という論難によって、この種のアプローチを断念する必要はなくなる。

くりかえすが、他個体に対する意味的認識というセオリーオブマインドの延長線上での経験科学的認識、という方略をとれば、われわれは、この論難をまぬがれることになる。

われわれは、この方途は、非常におおきな可能性を有していると感じる。そしてまた、既存の理解社会学的探求の成果を生かすことが可能になると感じる。

【「内部」も「外部」も】

以上のような文脈の延長でみると、昨今議論されている「社会学」論において、社会学者の視点を、対象とする「社会」の「内部」におくか、「外部」におくかという、問に対して、われわれは、「内部にも外部にも、置く」、むしろその両者の「齟齬」に着目する、ということになる、だろう。

「外部」派の論拠はいろいろあるだろうが、最大の論拠は、観察者は当事者の視点に立てない、というものだろう。すなわち、「内部」を志向したとしても、本人の意味把握を結局再把持することはできないのだから、社会「学者」としては、「外部」を志向するしかない、と。

しかし、上でみてきたように、意図（意味）の認識において、本人も、相手も、第三者（観察者）も、意図理解において、とくに質的な優劣はなかった。本稿の大きな特徴は言うまでもなく、意味把持における「本人」の特権的優位性を本質的に否定したことだ。

では、盛山のように「内部」志向ならば、よいのか？ もしわれわれの環境が、ヒトがヒトに進化したころの環境であったとするならば、それも良かったかもしれない。本人にせよ、その相手にせよ、観察者（ただし、「同種」にかぎる）にせよ、その「意図把握」は、環境の中を生き抜いてきた「性能のよい」ものである蓋然性がたかい。それに準拠するは、高い妥当性をもつだろう。

しかし、上に述べたように、われわれがいま生きている環境は、そうではない。いわば、「思い違い」をしながら、ヒトヒトはいきぬいている可能性が高い。

この「思い違い」に照準するには、「内部」と「外部」を両睨みできる視点が必要だろう。

このような言い方は、『イデオロギーとユートピア』での「浮遊する知識人」論と同様で、説得力がない、と感じる向きがあるかもしれない。

実際、盛山は、以下のように、と述べている。

「存在が意識を規定する」というテーゼをより徹底的に普遍的に適用するとどうなるか、それがマンハイムの取り組んだ問題であった。…（略）…しかし、「浮遊する知識人」こそが立場性に囚われない社会認識の担い手になりうるというマンハイムの解答は、明らかに説得的なものではなかった。」（盛山 2011:267）

しかし、このような反感は、われわれには、あたらない。なぜなら、われわれは、認識の存在被拘束性の公準をマンハイムととくに共有しないから、だ。

もちろん、われわれの、社会的経済的生理的な境遇が、われわれの「認識」に影響をあたえることはありそうなことだろう。

しかし、「認知療法」がおしえるところによれば、ヒトの態度のなかで、「認識」こそが、もっとも介入しやすい、いいかえれば、変化させることが容易なカテゴリーである。

もちろん、あらゆる種類の認識が容易に変化させることができるとは私もかんがえない。しかし、その変化しにくさの理由は、「認識の存在被拘束性」という公理のためではなく、以下でのべるような、「二種認知同時認識の困難性」のようなたんなるわれわれの脳の癖（traits）によるものとわたしたちは仮説する。

そして、この「二種認知同時認識の困難性」をも訓練（広義の「認知療法」）で、「すくなくともある程度は」克服することが可能である、と仮説するのである。

【おすすめの「外部」とは】

では、ここでいう「外部」とはなににあたるのか。われわれも、盛山と同様に、一種の批判的合理主義——当該の主張がなんからでも真理性をもつというるのは、その主張が批判に対して開かれており、少なくともいままでのところ、論駁されつくさせていない、という程度に暫定的な真理

性なのだ、という含意を奉じているからなのだ——の立場をとるので、じつは「外部」は、ある程度の説得力をもつものなら、なんでもいい*。

とはいえ、やはり現在において、もっとも「一番手」として、推奨される「外部」とは、現代自然科学であろう。世界中とくに先進国の秀才たちが、競争的にあらたなエビデンスを獲得し報告し、ピアレビューのフィルタリングを経て、公表されている知識の蓄積。これをあなどることはできないだろう。もちろん、神ならぬ身のヒトヒトのすることであるから、そこには、誤りも欺瞞（真理への欲求以外の欲求による真理性の故意の削減）もあるだろう。が、品質管理・信頼性で最大級の多国籍メーカー（トヨタ？）みたいなものだとはいえるだろう。

もちろん、こういったからといって、われわれのアプローチは、「現代自然科学の真理性」に「基礎を置く」一種の基礎付け的アプローチでないことは、もはやいうまでもないだろう。上記*でのべたように、「外部」はある程度の説得力をもつものなら、とりあえずなんでもいい。であるから、われわれのアプローチにとっても、（その「科学」自体を批判的に対象とするような）「(批判的) 科学社会学」のようなものもまったく可能である。

自然科学のなかでも、当然、ヒトにかかわるので、生物学が、着眼されよう。とくにダーウィニズムに固執する必然性はまったくないのだが、バイオダーウィニズムは、ヒト当事者にとって、意外な「外部」をもたらしてくれることがおおいという経験則があるので、バイオダーウィニズムはおすすだ。生物学のなかでも、ヒトにかかわるので、(自然) 人類学、心理学が推奨される。チョムスキーが、「言語学とは、生物学の一部門である」と述べたように、心理学も生物学の一部門である。生物学のなかでも、上記のように、バイオダーウィニズムを私は推奨するので、進化心理学が、推奨される。しかし、「進化」という語は、原語も日本語も、非常に、ミスリード（誤解よびよせやすい）ので、十分すぎるほどの警戒が、必要だ（桜井 2003 参照）。できたら「進化」という語はつかいたくないぐらいだ。以上から明らかなように、俗流「進化」イメージ（なーんだか、だんだんよくなる。なーんだか、だんだん複雑になる。つよいもののほうが偉い。複雑なもののほうが偉い。ヒトは複雑でもっともえらい。環境に適応した結果単純になるのは「退化」である。…）を、人間集団にそのまま投影した「社会ダーウィニズム」とは、縁もゆかりもない、ので、注意してほしい（「エヴォルーションリストの…」とも関係ない）。

区別して、自分のアプローチを「ダーウィニアン社会学」と試みに呼んできたが、やはり誤解されるので、今後は、「バイオダーウィニズムと社会学（「法と経済学」みたいなかんじ）」「バイオダーウィニストの(による)社会学」とでも呼んでみたい。（エヴォルーションリストではなくて、バイオダーウィニスト）。

【理解社会学「も」。しかし、バイオフォビア「ではなく」】

以上、現代ダーウィニズムを援用することで、理解社会学の方略を再擁護する、という議論をこころみてみた。以上の議論が、幸いにも、ある程度の成功をおさめていたとしても、

さらにそのあとに、懸念すべきことが生じてしまうようにも感じられる。すなわち、「理解社会学の方略をまさにとることの（副次的）効果としての、バイオフォビア（生物学嫌い）」である。

この点を、説明するためには、ふたたび、現代ダーウィニズムによる認識論に少し迂回しなければならぬ。

【同時同一対象二種認知の困難性：仮説】

うえで、筆者は、現代ダーウィニズム認識論を援用して、ヒトなど一部の生物には、外界を、いわば「モノとして」認識するメカニスティックコグニション、と、外界をいわば「ココロあるものとして」認識するメンタリスティックコグニションの、少なくとも二つの大別認知的カテゴリーがあるだろうと論じた。

さらにこの論脈に関連させてこれもあまり自覚されていないようにみえる一つの仮説を、提起してみたい。

それは、「同時同一対象二種認知の困難性」の仮説である。すなわち、われわれヒトは、同一の対象にたいして、同時に、以上の二種類の認知法を、働かせることがむずかしい、という仮説である。

たとえば、ヒトに対する開腹外科手術とか、犬でもカエルでも（あるいはヒトでも）解剖する場面を仮想してみてほしい。メスをいれて、開腹して、腔内の臓物がみえてくると、それまで「こころある」他者としてあった彼（女）が、一瞬「こころないモノ」のように見えてくるのではないだろうか。

ひとたび、バドコックによって、われわれの脳には二つの認知能力があり、その両者をつかって、ヒトの社会を認識すべきだ、といわれれば、それは至極当然のようにきこえてしまう。

しかし、こんな当然のことに気がつかずに（気がついてても？）一世紀にもわたって、社会科学において、上記のような認知アプローチをめぐる「対立」が鎮静しなかったこと自体、この「同時同一対象二種認知の困難性」に由来しているのではないだろうか。

すなわち、「同じ一つの社会という対象」を認識する以上は、「メカニスティック認識」でいくのか「メンタリスティック認識」でいくのか「選択」しなければならないかのような（それ自体根拠のない）「暗黙の要請」（同時同一対象二種認知の困難性）が効いていたのではないだろうか。

【社会学的バイオフィビアからの自覚的脱却】

現代ダーウィニズムに援用されて、安んじて、理解社会学の方略をとったとしよう。

しかし、そこには、また、以上のように「同時同一対象二種認知の困難」という認知上の「癖」をわれわれがもっているという「罨」がひかえているようにおもわれる。

理解社会学の方略をとることじたい、現代ダーウィニズムからも支持されるような正当な方略選択である。が、そこで理解社会学をおこなう社会学者も、生身のホモサピエンスである。かれにおいてふたたび、「同時同一対象二種認知の困難」が無意識にはたらいてしまう蓋然性がつよい。

そこから、望ましくない副作用が生じる危険性がある。この危険性はさまざまありうる。が、筆者がよく遭遇するのは、生物学的認識の相互作用モデルへの「囲い込み」であり、それによる科学的身分のすり替え（メタファー・アナロジー化）である。と、これだけいってもわからないだろう。説明しよう。

このように、理解社会学の方略を採ること自体が、社会学者の認知モードのスイッチング（メンタリストティックゴグニションの「オン」、その結果としてのメカニスティックゴグニションの「オフ」）となってしまう、

メカニスティックゴグニションや、（その一例である）生物学的認知の、忌避もしくは、一部領域（「相互作用領域」）への囲い込み、その悪しき帰結としての科学的認知身分の低下（「応用」から「メタファー」への格下げ）につながりやすい、と感じられる。

というわけで、本稿は、理解社会学の方略を、現代ダーウィニズムの視点から、擁護・再評価する。が、理解社会学の方略を選択することは、生物としての社会学者にバイオフィビアを、生起させやすい。このことへの強い、自戒・自覚を、社会学者はもつべきであると考えます。

この文脈からも、「内部」と「外部」の両睨みは、推奨されよう。

（本稿は、過年の日本社会学会での拙発表を発展させたものです。コメントをくださったみなさんに感謝します。）

内井惣七「道徳起源論から進化倫理学へ、最新稿」最終閲覧2014年10月22日

<http://www1.kcn.ne.jp/~h-uchii/evol.ethics.html>

Badcock, C. R. 2000. *Evolutionary Psychology : A Critical Introduction: Polity.*

Barkow, Jerome H., Leda Cosmides and John Tooby. 1992. *The Adapted Mind : Evolutionary*

Psychology and the Generation of Culture: Oxford University Press.

Baron-Cohen, Simon, 長野 敬, 長畑 正道, 今野 義孝. 2002. *自閉症とマインド・ブラインドネス*: 青土社.

Dennett, Daniel Clement, 若島 正, 河田 学. 1996. *「志向姿勢」の哲学：人は人の行動を読めるのか?*: 白揚社.

Humphrey, Nicholas 垂水 雄二. 1993. *内なる目：意識の進化論*, : 紀伊國屋書店.

Weber, Max, 海老原 明夫, 中野 敏男. 1990. *理解社会学のカテゴリー：未来社*.

桜井, 芳生. 2003. "ダーウィニアン社会学へのイントロダクション--それは、「何でない」のか?". *人文学科論集*(57):57-73.

盛山, 和夫. 2011. *社会学とは何か：意味世界への探究*, ミネルヴァ書房.